

「ナバックレター」(養鶏版)の配信に当って

平成20年1月吉日
日生研株式会社
代表取締役社長 田中浩正

新年明けましておめでとうございます。

昨年来の配合飼料価格高騰、生産資材の価格上昇など、皆様方の経営を圧迫する要因が山積し、厳しい年明けとなりましたが、このような環境の中で、常日頃大変お世話になっております皆様方に対し、弊社といたしまして少しでもお役に立つことが出来ないものかと考えさせて頂いた結果、今回「ナバックレター」(養鶏版)の配信を開始することと致しました。

「ナバックレター」(養豚版)は、平成17年5月より配信を開始し、現在、第29号に至っていますが、配信ご希望の皆様方からは「素直に読める技術情報」としてご好評をいただいております。

養鶏版も、皆様方へのお役に立つ情報提供の一つとして配信を続けていく予定でおりますので、ぜひこの機会にご利用頂ければ幸いです。

ご不明な点がございましたら、ナバックレター・サービス事務局(TEL:0120-789-723 FAX: 0120-789-599)までお問合せ下さい。

今後とも弊社製品をご愛顧賜りくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

マレック病予防対策は万全か？

マレック病(MD)が最初に報告されて100年、そして予防のための生ワクチンが実用化されて35年が経った。過去には鶏群の20～50%に達する死亡・淘汰羽数を伴う非常に大きな経済的損失を与えるMDの発生がみられたが、現在はそれほど大きな流行は見られなくなった。これにはワクチン接種と感染症対策としての衛生的飼養管理の徹底が奏功しているためである。しかし、依然として本病の発生は認められ、最近では成鶏期における本病の発生が問題になるなど、従来の病徴とは異なる面も見えてきた。果たしてMDは変わって来たのか？本病の現状とその予防対策は？

1. 家畜衛生統計にみるマレック病の発生動向

家畜衛生週報に掲載されたMDの発生報告を表1にまとめた。この発生数は家畜保健衛生所でMDと診断された採卵鶏および肉用鶏の両者が含まれている。なお、他の感染症との合併症についてもMD発生数として加算して集計した。表のとおり、年により変動があるが、MDは1993～1999年にかけて1万羽以上の発生が報告されている。しかし、2000年以降は減少しており、2006年ではMDと診断された鶏は2,561羽に過ぎない。

2. 食鳥検査成績にみるマレック病の摘発状況

平成4年に施行された食鳥検査によって摘発される屠殺禁止あるいは全廃棄される鶏羽数は、全ての感染症、非感染症あるいは異常について個体別に診断されるものであり、鶏の疾病発生統計としては非常に精度の高いものといえる。

その検査成績からMDのみを抜粋して表2に示した。ブロイラーでは毎年約55,000～65,000万羽余が検査され、約1～1.2%が屠殺禁止・全廃棄される。この中MDは平成13年度までは0.08～0.16%で推移したが、14年度以降は急速に減少し、17年度では約0.01%となった。一方、成鶏については平成5年度以降、平均で毎年約7,200万羽が検査され、約1.8%が屠殺禁止・全廃棄となったが、その中、MD摘発羽数はわずかであった。

表1. 家畜衛生統計に見るMDの発生

暦年	発生羽数	暦年	発生羽数
1983(58)	59,287	1995(7)	14,685
1984(59)	60,391	1996(8)	30,006
1985(60)	58,278	1997(9)	30,328
1986(61)	36,066	1998(10)	13,938
1987(62)	16,512	1999(11)	14,536
1988(63)	24,835	2000(12)	7,207
1989(1)	19,939	2001(13)	4,413
1990(2)	6,469	2002(14)	3,585
1991(3)	18,067	2003(15)	5,761
1992(4)	9,457	2004(16)	1,054
1993(5)	13,813	2005(17)	2,503
1994(6)	20,748	2006(18)	2,561

(家畜衛生週報から)

3.成鶏期に於けるマレック病の発生状況

1)成鶏期におけるMD発生の現状

MDは雛の時期に好発する感染症として認識されており、MDの臨床例は通常、5週齢から産卵開始前に発病し、それ以降はほとんど発生しない。しかし、その好発日齢を過ぎた後、産卵率の低下と死亡率の増加を伴ったMDの発生が認められ、大きな経済的被害に結びつくこともある。それは、我が国でも以前から前述した食鳥検査成績に見られるように、摘発羽数は少ないものの成鶏においてもMDが確認されている。ただし、食鳥処理のため出荷される成鶏は通常、健康鶏でありMD罹患鶏はそれまでに死亡・淘汰されていると考えられることからこの数値はMD罹患の実態とは言えないであろう。いくつかの症例ではMDは最初30週齢以上で臨床的に明瞭となるもの、あるいは産卵第2サイクルに入る強制換羽後に起こることもある。産卵率の推移を注視しながら鶏をよく観察し、病鶏を摘発淘汰する事が重要である。

2)成鶏期のマレック病はどうして発生するか

成鶏期の本病がどうして起こるか、その発病機構については十分に解明されていない。発病の原因について3つの説がある。その一つはワクチンで免疫された成鶏も野外MDウイルスの感染に対して感受性であり、新たな野外MDウイルスの感染によって腫瘍性病変が発現するというものである。2つ目は、飼育環境要因の悪化が幼雛期に感染した野外MDウイルスを活性化させることで腫瘍が形成されるというものである。そして最後は、現在のMD生ワクチンでは防御出来ない非常に強い病原性を持ったMDウイルスの出現に因るといわれるものである。最後の強毒MDVの出現に関しては我が国では確認されていない。これらの要因が複合して発症するものと考えられるが、養鶏場内における野外MDウイルス汚染濃度が上がった場合に発生することは確かであろう。(次号に続く)

表2. 食鳥検査成績に見るMDの摘発

暦年	食鳥検査によるMD摘発羽数(屠殺禁止含む)					
	ブロイラー			成鶏(廃鶏)		
	検査羽数	MD羽数	摘発率(%)	検査羽数	MD羽数	摘発率(%)
1993(5)	654,949,333	1,051,859	0.161	70,778,236	2,888	0.004
1994(6)	617,178,963	634,915	0.103	69,080,991	1,290	0.002
1995(7)	606,019,139	634,588	0.105	68,917,480	562	0.001
1996(8)	584,089,634	494,365	0.085	67,800,404	485	0.001
1997(9)	578,745,693	632,642	0.109	72,405,697	82	0.000
1998(10)	572,087,040	494,194	0.086	73,445,111	58	0.000
1999(11)	574,509,278	770,638	0.134	71,309,602	162	0.000
2000(12)	572,362,349	758,245	0.132	72,401,393	44,106*	0.061
2001(13)	555,906,901	588,102	0.106	66,331,721	421	0.001
2002(14)	592,106,266	339,611	0.057	75,028,222	39	0.000
2003(15)	598,856,749	160,807	0.027	81,113,315	81	0.000
2004(16)	596,816,353	68,424	0.011	73,038,134	92	0.000
2005(17)	615,888,999	78,885	0.013	73,285,268	93	0.000
2006(18)	629,287,721	127,713	0.020	73,792,062	24	0.000

*未確定であるが、大部分はブロイラー羽数に変更される。

(家畜衛生週報から)